

サイバースペース：「往来」の空間？

勝 又 正 直

The Cyberspace : the space of "Orai" ?

KATSUMATA Masanao

キーワード：キーワード：インターネット、往来、往来物、マルチメディア

Key words: Internet, Ourai, Ouraimono, Multi-Media

1 はじめに

インターネットは、学術用のメールなどの交換から、テキスト・画像・音声などさまざまな内容を提供するマルチ・メディアな World Wide Web (WWW) の場へと発展し、今や巨大な情報空間（サイバースペース）を形成するに至った。（「サイバースペース」(Cyberspace) とはもともとはウィリアム・ギブスンがSF小説『ニューロマンサー』のなかで用いた言葉で、コンピュータネットワークの仮想空間を指す¹⁾）。この発展は当初の学術用の目的からは想像もできない発展であったと言える。

だがこのメールなどの応答からマルチ・メディアな情報の空間へ発展は、はたして奇妙なものなのであろうか？

本稿は、日本における「往来物」の発達を振り返ることで、このインターネットの発達が決して奇妙なものではないことを明らかにする。そしてこの「往来」の空間のもつ可能性について若干の予測をたててみたい。

2 「往来」から「往来物」へ

試みに、「往来」の定義を辞書に求めてみよう。

「おうらい(ワウライ)【往来】

- 1 (一する) 人や事物が行ったり来たりすること。また、その人。

①ある場所へ、また、ある道をゆききすること。通行。

「人(車)の往来が激しい」

②互いにゆききすること。交際すること。「しばしば往来する」

③(考えなどが) 消えたり浮かんだりすること。「胸(心)に往来する」

2 回国修行の行脚(あんぎゃ)。

3 行き来する道。道路。街道。

4 手紙。特に往復書簡。また、そのやりとり。

5 往復書簡を集めて手習いの手本としたもの。近世では、寺子屋の教科書などに用いた。→往来物。

6 「おうらいてがた(往来手形)」の略。

7 熱が出たり引いたりすること。「寒熱往来」

8 相場が一定の範囲内を上下して、大幅な値動きをしないこと。持合い。²⁾

この定義からもわかるように、元来は「往来」とは読んだ通り、「行ったり来たり」することである。それが「行き来」となって「交通」の意味をもつようになる。また、やり取りされる手紙(往復書簡)をも指すようになったのである。

手紙は一定の様式(プロトコル)に則って書かれる必要があるため、その様式による模範文例集が編纂された。それが「往来物」の原型である。

ここでまた辞書の定義を見てみよう。

「おうらい-もの(ワウライモノ)【往来物】

(「往来」は「消息往来」の意)

サイバースペース：「往来」の空間？

鎌倉時代から明治初期にかけて初等教育の教科書、副読本として編まれた書物の総称。平安時代には手紙文の模範文例集で、鎌倉時代以降、作文用の短句・単語集や文案・文例集となり、さらに社会常識、実用知識なども盛りこんだものも現われた。「明衡往来」「庭訓往来」「商売往来」など。³⁾

手紙文の模範文例集は人々の読み書き、さらに習字のための教科書となって学習の対象になった。もとより文字を書くことの大きな目的は手紙をかくことであり、そのため手紙文例集である「往来物」は書くこと一般の教科書となったのである。つまりやりとりされる手紙は手紙の模範文例集となりさらに手習いの教科書となった。江戸時代には寺子屋の教科書として使われた。

さらにこの「往来物」(手紙文例集)はさまざまな情報を盛り込むことで、手習いの教科書から発展して、一種の情報冊子の体をなすにいたる。

このことは近世においてもっとも普及した往来物である「庭訓往来」の展開にみてとれる。

3 『庭訓往来』

『庭訓往来』(ていきんおうらい)とは、室町前期、応永年間頃の成立したとされる往来物である。往復書簡の形式を採り、武士の日常生活に関する諸事実・用語を素材とする初等教科書として編まれ、室町・江戸時代に広く流布した。

「1年の各月に往状・返状を一對ずつ配し、閏(うるう)8月の往状をくわえて25通の書状からなる。各書状にはそれぞれ衣食住、職業、産物、政治、仏教、病気など、社会全般の事物に関する単語を列举し、武士や庶民の日常生活に必要な知識をまなべるようになっている。安土桃山時代以前に筆写されたものだけでも40種以上あり、江戸時代には注釈本、絵入り本などが各種刊行されて庶民の家庭での教育や寺子屋でひろくつかわれた。」⁴⁾

ここで参考として本文の一部を引用しよう。

『『庭訓往来(ていきんおうらい)』(写本)の五月返状

不審千万の所に、玉章(たまずさ)忽(たちま)ち到来す。更に余麿(ようつ)を貽(のこ)すこと無し。便宜をもって徘徊せられれば尤(もっと)も本望也。

抑(そもそ)も、客人光臨、結構奔走察し奉り候。借用せらるる所の具足、所持分に於いては、之を進ずべき也。

灯台、火鉢、蠟燭台(ろうそくだい)、注文に載せられずと雖(いえど)も、進ずる所也。

能米〔玄米〕、馬の大豆、秣(まぐさ)、糠(ぬか)、藁(わら)、味噌、醬(ひしお)、酢、酒、塩梅、并

(なら)びに初献の料に海月(くらげ)、熨斗鮑(のしあわび)、梅干。削り物は、干鰹(ほしがつお)、円鮑(まるあわび)、干蛸(ほしだこ)、魚躬(のみ)、煎海鼠(いりこ)。生物は、鯛(たい)、鱸(すずき)、鯉(こい)、鮒(ふな)、鰻(なよし)、王余魚(かれい)、雉(きじ)、兎、雁、鴨、鶉(うずら)、雲雀(ひばり)、水鳥、山鳥一番(ひとつがい)。塩肴(しおざかな)は、鮎(あゆ)の白干、鮪(しび)の黒作(くろづくり)、鱒の楚割(すいり)、鮭(さけ)の塩引、鰯(あじ)の鰯、鯖(さば)の塩漬、干鳥、干兎、干鹿、干江豚(いるか)、豕(いのこ)の焼皮、熊の掌(たなごころ)、狸の沢渡、猿の木取(ことり)、鳥醬(とりびしお)、蟹味噌(かにみそ)、海鼠腸(このわだ)、・鱗(うるか)、烏賊(いか)、辛螺(にし)、栄螺(さざえ)、蛤(はまぐり)、・交雑喉(えびまじりごこ)、氷魚(ひうお)等。

或いは買いおぎのい、或いは乞い索(もと)め、これを進せしめ候。猶以って不足の事候わば、使者を給うべき也。謹言

五月日

大夫将監大江
左京進殿 御返事

[大意]

御無沙汰のため、あなたの御様子を心配しておりましたら、早速お手紙を頂戴いたしましたので、気持ち晴れ晴れ致しました。ご都合のよろしい折にお越し下されば、大変うれしく存じます。

さて、賓客のためにご多用のことと拝察する次第ですが、あなたが借用を希望された品々のうち、私が持っているものは全て提供いたしますよう。

灯台、火鉢、蠟燭台はご指示がございませんでしたが、必要かと存じますので、お貸し申し上げますよう。

能米、馬の大豆、秣、糠、藁、味噌、醬、酢、酒、塩梅、ならびに初献の料理用の海月、熨斗鮑、梅干、それから削り物には干鰹、円鮑、干蛸、魚躬、煎海鼠、生ものには、鯛、鱸、鯉、鮒、鰻、王余魚、雉、兎、雁、鴨、鶉、雲雀、水鳥、山鳥一つがい、また、塩肴等には鮎の白干、鮪の黒作、鱒の楚割、鮭の塩引、鰯の鰯、鯖の塩漬、干鳥、干兎、干鹿、干江豚、豕の焼皮、熊の掌、狸の沢渡、猿の木取、鳥醬、蟹味噌、海鼠腸、◆鱗、烏賊、辛螺、栄螺、蛤、◆交雑喉、氷魚など。

これらを購入したり、探して、貴殿にお届け致しますよう。このほかに必要なものがあれば、遠慮なく使者を遣わして下さい。」⁵⁾

手紙の形式のなかにさまざまな固有名詞を盛り込む、手紙の形式とさまざまな語彙を習得させるものになっている。

3 『庭訓往来』の展開

では庭訓往来の実物はどのようなものでどのような展開をみせていたのだろうか。

石川松太郎は『庭訓往来』を、

- (1) 手本系 習字の手本としてもっぱら用いられたもの。
- (2) 読本系 ルビなどがついた読本的な性格のつよいもの。
- (3) 註本系 さらに読み方が表記され、註がついているもの。
- (4) 絵抄系 註がさらに発展して絵入りとなったもの（「抄」とは「ある部分を抜き書きして注釈すること」）

の四つに分類している⁸⁾。

この分類に従って、膨大な庭訓往来のなかで典型的なものをいくつかとりあげてみよう。

(1) 手本系

『御家庭訓往来』（おいえていきんおうらい）文政11年（1828）⁷⁾

読み順などを示す返り点が打っており、(2)読本系の性質もあるが、基本的には習字の為の手本とみてよいだろう。

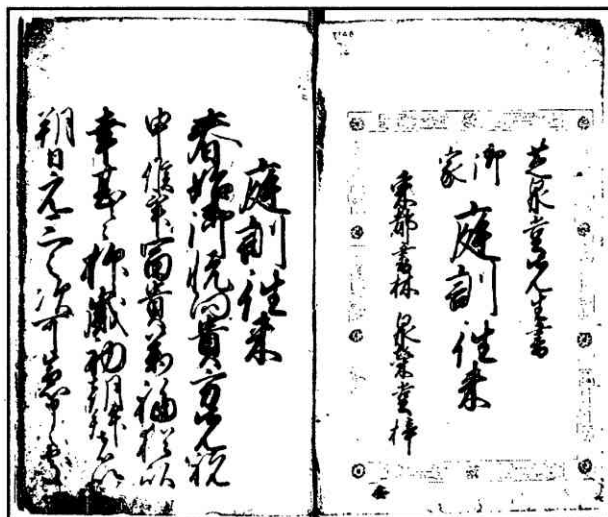


写真1 『御家庭訓往来』

(2) 読本系

『真舛両点庭訓往来』（しんそうりょうてんていきんおうらい）⁸⁾

行書体と楷書体の両方をあげ、そのそれぞれに両点をつけたもの。ちなみに漢文に返り点だけを付けるのを片点（かたてん）というのに対して、返り点と送り仮名を合わせ付けたものを「両点」という。江戸期の印刷である。



写真2 『真舛両点庭訓往来』

(3) 註本系

『首書読法庭訓往来具註抄』（しゅしょどくほうていきんおうらいぐちゅうしょう）⁹⁾

本文の読み方を頭註にし、本文の後に註釈をつけ、さらに欄外にも註がついている。

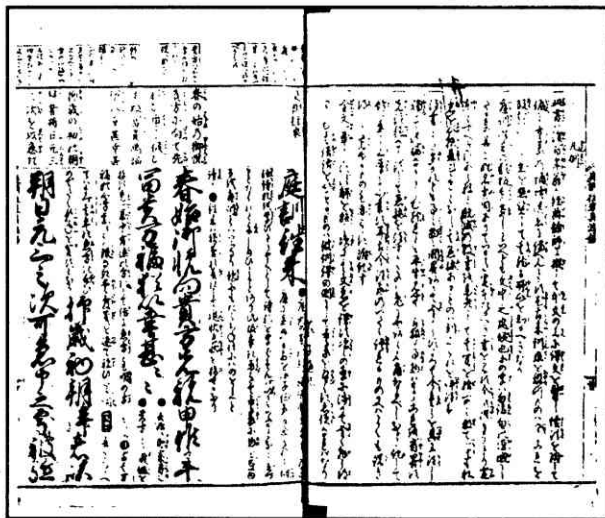


写真3 『首書読法庭訓往来具註抄』

サイバースペース：「往来」の空間？

(4) 絵抄系

『校本庭訓往来（見返）』（こうほんていきんおうらい）
文政12年（1829）¹⁰⁾

註が発展して絵が書き込まれるようになる。



写真4 『校本庭訓往来（見返）』

『絵本庭訓往来』（えほんていきんおうらい）¹¹⁾

絵を入れることはさらに発展して、庭訓往来には葛飾北斎が挿し絵を描いているものがある。それが、絵本庭訓往来（えほんていきんおうらい）である。

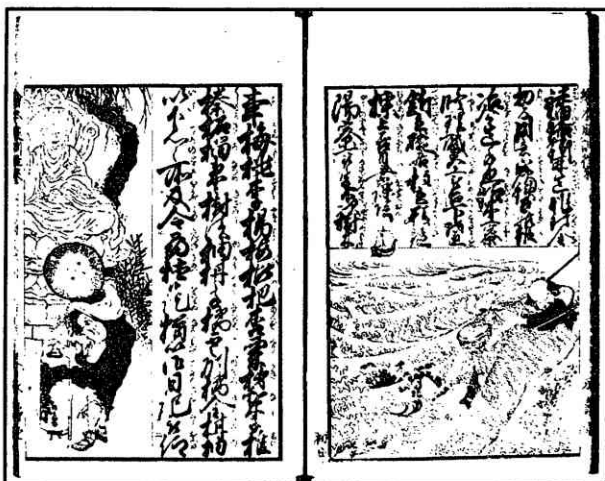


写真5 『絵本庭訓往来』

(1)手本系、(2)読本系、(3)註本系、(4)絵抄系の各種は必ずしも前者から後者へと完全に移っていくわけではない。各種の庭訓往来が併存していた。しかし石川) の調査によれば、時代を経て後期にいたるほど、(1)手本系、(2)読本系から(3)註本系、(4)絵抄系の本が次第に多くなっていく。『庭訓往来』は単なる手本から次第に註をつける形でしだいに豊富な内容をもつにいき、単なる文字から

その読み（音）と註としての絵（映像）をも内容にもつようになったとみることができるであろう。

4 マルチメディアとしての往来物

『庭訓往来』の展開にみられるように、「往来物」ではしだいに文字だけでなく絵という別のメディアまでもが盛り込まれるようになった。

その理由としては、日本語の表記自体が、音（かな）と絵文字（漢字）という二重のメディア（媒介）をつかって表記しているため、多様なメディアを盛り込むことに向いていたのかもしれない。

ともあれ、往来物は註を付ける形で多様な内容が付加されたいった。そうした例をすこし挙げてみよう。

(1) 『女庭訓往来』¹²⁾

女性用の「庭訓往来」。註に図版が多く盛り込まれている。



写真6 『女庭訓往来』

(2) 『商売往来絵字引』¹⁴⁾

商売往来の定型的な内容にすべてに彩色された絵が付され、同時に講釈も付されているもの。幕末のものといわれる¹⁵⁾。

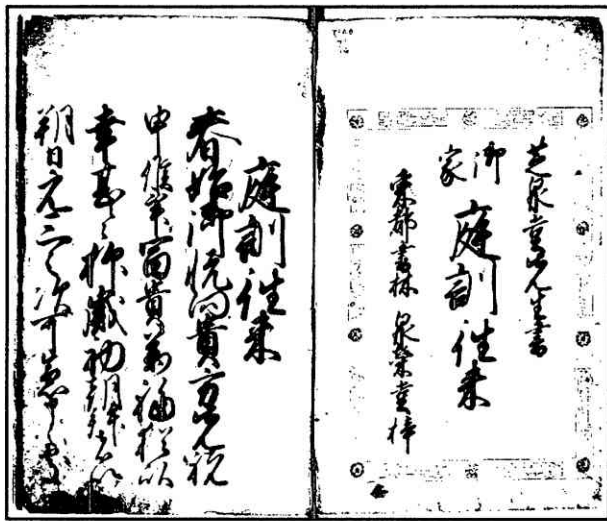


写真7 『商売往来絵字引』

(3) 『世界商売往来』¹⁶⁾

こうした「往来物」は明治になっても国定教科書の登場（明治37年）まで活況を呈している。テキストとそれの発音記号の代わりの表意文字（カナ）と挿し絵というマルチメディアな表記方法は外国の事物とアルファベットまで飲み込んでその内容にしている。



写真8 『世界商売往来』

5 情報冊子へ

手紙の模範例文集から教科書になった「往来物」であるが、ものによっては、教科書というより、情報の小冊子と見る方が妥当なものもある。

たとえば、江戸後期に出版された『名古屋往来』¹⁷⁾は、「抑名古屋の御城は、昔日慶長年中に治国太平の印にて始て築き給ひけり・・・」で始まる一通の手紙文の形式

をとっているが、内容はもっぱら名古屋の名所名跡の紹介である。¹⁸⁾ これは手紙文の形を借りた情報冊子であったと見た方がよいと思われる。

ではなぜ手紙文の形式でかかれているかという問題がある。もし日常語で書いたとしたら、それは尾張弁のことばになってしまい、他国の人間には理解できなかったであろう。つまり手紙文（候文）というのは江戸時代における唯一の共通語であったのであろう。



写真9 『名古屋往来』

6 まとめ

以上、「往来物」の展開を追ってみた。そこでは手紙の交換から手紙模範例集、さらに情報発信冊子という展開が見られることがわかった。インターネットはメールの交換から情報提供の場としてのホームページという発展を遂げたのだが、じつはそれは「往来物」という先例があったのである。

もともと人間のコミュニケーションは対話的な関係から始まる。たとえそれがモノローグ（独白的）なものへ転じようと、その出自に対話的な関係が潜在している¹⁹⁾。

「往来物」において手紙のもつ対話性は、註という別のテキストへの参照へと発展していき、「往来物」はしだいに「間テキスト性」(intertextuality)²⁰⁾を帯びるようになる。さらに読みと註と挿し絵というマルチメディアな参照関係を作り上げることで「間メディア性」を作り上げるにいったのである。

インターネットがもつ「ハイパーテキスト性」とマルチメディア性は、対話関係の発展としての「間テキスト性」と「間メディア性」の現れに過ぎない。そしてそれは「往来物」というマルチメディアな出版物によって先取りされていたのである。

サイバースペース：「往来」の空間？

注

- 1) ウィリアム・ギブスン：ニューロマンサー（黒丸尚訳），90，早川書房，1986.
- 2) 国語大辞典（新装版），小学館，1988.
- 3) 国語大辞典（新装版），小学館，1988.
- 4) Microsoft：Encarta Encyclopedia 2001, Microsoft Corporation, 2000.
- 5) Microsoft：Encarta Encyclopedia 2001, Microsoft Corporation, 2000.
- 6) 石川松太郎：往来物の成立と展開，13-15，著雄松堂出版，1988.
- 7) 御家庭訓往来（おいえていきんおうらい）和泉屋吉兵衛（奥付）／文政11（跋）
 〔筆書者〕芝泉堂（書）〔板元〕泉栄堂〔出版地〕江戸〔西暦刊年〕（1828）〔板型〕大本（29纏）東京学芸大学付属図書館望月文庫所蔵〔目録番号〕2337〔請求記号〕T1AO/71/14 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f071_014.html)
- 8) 『真卿両点庭訓往来』（しんそうりょうてんていきんおうらい）総州屋興兵衛／〔出版地〕江戸〔板型〕中本（18纏）〔備考〕桂之家主人の序あり。東京学芸大学付属図書館望月文庫所蔵〔目録番号〕2343〔請求記号〕T1AO/71/20 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f071_020.html)
- 9) 『首書読法庭訓往来具註抄』（しゅしょどくほうていきんおうらいぐちゅうしょう）
 〔編著者〕部関牛（注釈）〔角書〕改正再版〔頭書〕振仮名付読法〔板元〕積玉圃〔出版地〕大坂〔板型〕大本（25纏）東京学芸大学付属図書館望月文庫所蔵〔目録番号〕2346〔請求記号〕T1AO/71/23 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f071_023.html)
- 10) 校本庭訓往来（見返）（こうほんていきんおうらい）鹿島中兵衛／文政12
 〔編著者〕峰岸竜父（校并書）〔画者〕戴斗（画図）〔筆書者〕峰岸竜父（校并書）〔角書〕訂正絵鈔〔出版地〕大坂〔西暦刊年〕1829〔板型〕大本（26纏）東京学芸大学付属図書館望月文庫所蔵〔目録番号〕日本近代教〔請求記号〕T1AO/71/102 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f071_102.html)
- 11) 絵本庭訓往来（えほんていきんおうらい）永楽屋東四郎／文政11（跋）
 〔画者〕葛飾北斎（画）〔板元〕永寿堂〔出版地〕名古屋〔西暦刊年〕（1828）〔板型〕半紙本（23纏）東
- 京学芸大学付属図書館望月文庫所蔵〔目録番号〕2324〔請求記号〕T1AO/71/1 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f071_001.html)
- 12) 石川松太郎：往来物の成立と展開，13-15，著雄松堂出版，1988.
- 13) 女庭訓往来（巻頭）（おんなていきんおうらい）山田屋佐助／〔角書〕婦人必読／故事注解（見返）／頭書絵解（題簽）〔別題〕女庭訓往来倭文鑑（見返）／女庭訓往来倭絵抄（題簽）〔頭書〕婦人日用調法秘伝抄／女庭訓の絵抄〔出版地〕江戸〔板型〕大本（26纏）東京学芸大学付属図書館収録〔目録番号〕4632〔請求記号〕T1AO/75/60 望月文庫往来物目録・画像データベース
 (http://library.u-gakugei.ac.jp/orai/f075_060.html)
- 14) 奈良教育大学教育資料館所蔵
 (<http://beth.nara-edu.ac.jp/COLLECTION/c2-021.htm>)
- 15) 梅村佳代氏の解説による。
 (<http://beth.nara-edu.ac.jp/COLLECTION/collection.htm#SER1>)
- 16) 奈良教育大学教育資料館所蔵
 (<http://beth.nara-edu.ac.jp/COLLECTION/c5-015.htm>)
- 17) 名古屋稀書刊行会：名古屋往来，名古屋稀書刊行會，1934.
- 18) 小泉 吉永（編著），石川松太郎（監修）：往来物解題辞典解題編，630，青空出版2001.
- 19) Tzeta Todorov：Mikhail Bakhtine, le principe dialogique, Éditions du Seuil, 1981, 大谷尚文訳，ミハイル・バフチン 対話の原理，法政大学出版，2001.
- 20) Julia Kristeva：Σημειωτική, Éditions du Seuil, 原田邦夫訳，記号の解体学—セメイオチケ 1, 61, せりか書房，1983.

(受稿 平成14年10月9日)

(受理 平成14年11月28日)